

奪われたものは、もう返さなくていいです

クラリス

バルベナ公爵家の養女。
母や義姉に搾取され
自分自身の能力を
隠し続けていた。
ひたむきな賢い令嬢。

登場人物紹介

アレクシス

優秀だが、人を寄せ付けない
冷たい雰囲気王子。
幼い頃、クラリスに救われ
彼女を想い続けている。

エミリアン

隣国の飄々とした第二王子。
何か目的があって
留学してきたようで……

ブリジット

エミリアンと共に
留学してきた公爵令嬢。
クラリスの友人となる。

ジュディット

バルベナ公爵家の嫡子。
努力が嫌いで、
面倒なことを全て
クラリスに押しつけている。

ラファエル

アレクシスと双子の王子。
人に好かれる青年だが、
優秀な兄弟に
コンプレックスがある。

マルス

アレクシスの腹心である
オダン公爵家令息。
真面目な俊才。

その日のバルベナ公爵家の屋敷は朝から少し騒がしかった。いつもとは雰囲気が違うように感じていたけれど、それを私に教えてくれる人はいない。

屋敷ぎになって、お義姉様付きの侍女が私の部屋に来了。何か用事があるのかと思えば手にはドレスを持っていて、急いで着替えるように言われる。

お義姉様のお下がりだとしても私のためにドレスを用意されるのは初めてで、うれしいと思ったけれど着方がわからない。それを見た侍女は面倒くさそうに着替えを手伝ってくれた。

時間がないと急かされるようにして玄関に向かうと、お母様とお義姉様はもうすでに綺麗なドレス姿で準備を終えていた。何も知らされないまま私も馬車に乗せられ、そこでようやく行き先を知る。

今日は王妃様のお茶会に招待されたので王宮へ行くのだという。しかも、お茶会はお義姉様と王子たちを会わせるためのものらしい。

王族や貴族だけが魔力を持つこの国の貴族令嬢は、七歳になるまで外出しない。まだ魔力が安定しないうちは屋敷の中で大事に育てられるからだ。

そのため、二か月前に七歳になったお義姉様は、従兄弟である王子に会うのは今日が初めてらし

い。どうして私まで連れてこられたのかと思えば、養女である私とも会ってみたいと王妃様が言われたからだ。

初めての外出で王宮に連れてこられるとは思わなかったけれど、公爵家の屋敷よりも広くて綺麗な建物に目を奪われる。きよろきよろしているとお母様に叱られたが、同じようにはしゃいでいるお義姉様が叱られることはない。今日の用事はお義姉様のためのお茶会だから、おまけの私は邪魔しないようにと釘を刺される。

お茶会の場所に案内されると席が用意されていた。私も座って王妃様を待とうとしたら、お母様に声をかけられた。

「あなたは必要ないから、どこかに行っていないさい」

「で、でも」

「王妃様には帰る時に挨拶すればいいわ。今日はジュディットが王子たちに会う大事な日なの。あなたは関係ないのだから、邪魔しないようにここから離れていなさい。あとで誰かに探しに行かせるわ。わかったわね」

横にいたお義姉様からも冷たい言葉を投げられた。

「そうよ。クラリスがいても誰も喜ばないのだから、あっちに行つてなさいよ」

「はい……」

こんな広い王宮の庭で一人になるのは怖い。だけど、お母様とお義姉様に言われたら逆らえなかった。

お茶会の会場から離れようと歩いていたら、庭の奥に小屋があるのを見つけた。庭師が使う部屋なのかと思って窓から中を覗こうとしたら、後ろから誰かに声をかけられた。

「どうしてこんなところにいるんだ？」

「え？」

振り返ると、少し年上だと思われる令息がいた。肩まで伸ばした銀色の髪がさらさらして光っている。服装がドレスだったら令嬢に見えてもおかしくないくらい綺麗な顔。だけど、その表情は冷たく、きりつとした青い目はこちらをにらんでいるように見えた。

「ここは王妃の庭だぞ。普通の貴族は入れないはずだ」

「あ、王妃様に招待されたからです」

そうだった。ここは王妃の庭と呼ばれる、王宮でも限られた人しか入れない場所。こんなところにいたら怪しまれるのは当たり前だ。信用してもらおうと王妃様から招待されたことを説明したのに、なぜか令息は警戒を強めたようだ。

「母上が招待だと？ 今日バルベナ公爵家の夫人と令嬢が二人来ると言っていたな。お前はどちらだ？」

「……養女のほうです。クラリスと申します」

王妃様を母上というこの人は、三人いる王子の一人なのか。何か失礼なことをしてしまったのかなかと不安になる。

「そうか。それで、クラリスはどうしてここに？ 向こうでお茶会をしているはずだが」

「……私は顔合わせには関係ないと言われたので、邪魔にならないようにここで待っています」

「……それは、どういうことだ？」

聞かれたからには答えなくてはいけない。事情を説明すると、王子は面白くなさそうにふうんと言った。もしかして本当に公爵家の者なのかと疑われている？ でも、どうやって本当だと信じてもらえるのかわからず不安に思っていたら、優しく頭を撫でられた。見上げた王子の顔にはふわりと微笑みが浮かんでいる。

「そんな顔しなくていい。怒っているわけじゃない。どうしてここにいるのか不思議だったからだ。誰かが探しに来るまではこの辺にいなきやいけないのか？」

「はい」

「じゃあ、一緒に遊んで待つか」

「え？」

「嫌なのか？」

「いいえ、うれしいです」

一人でいるのは心細かったから、差し出された王子の手がうれしくて迷わず手を取る。王子は私の手を握ると、楽しそうに笑った。

「俺はアレクシスだ。行こうか、クラリス」

「はい！」

アレクシス様と手をつないだまま、一緒に庭の奥へと向かう。誰かに手をつないでもらうのは初

めてで、右手が温かくてなんだか身体がぼかぼかする。

背が高いアレクシス様を見上げたら、目が合うたびに笑いかけてくれた。それがうれしくて私も笑ってしまう。こんなに笑っていられるのは生まれて初めてのことです。笑ったまま顔が固まってしまうんじゃないかと思うくらい。

アレクシス様と過ごす楽しい時間はあつという間で、気がつけば日が暮れかけていた。

「クラリス様、どこですか！」

遠くから私を呼ぶ声が聞こえた。知らない女性の声。だけど、呼ばれたからには返事をしなければいけないと思い、ここにいると返事をする。慌てて近づいてきた女性は女官のようだった。

「こちらにいましたか。王妃様がお呼びです」

その目は公爵家の屋敷にいる侍女の目と同じだった。口調は丁寧だけど、どうしてこんな子に仕えなくちゃいけないんだ、と見下しているような目だ。嫌だなと思ったけれど、わざわざ言うことはない。

「早くしてください。王妃様を待たせてしまいます」

「わかりました」

アレクシス様にお礼を言って女官についていこうとしたが、それを止めたのはアレクシス様だった。

「お前は母上付きの女官か？」

「え、ええ。そうです」

「貴族ではあるだろうが、公爵家の令嬢よりも身分が上なのか？」

「え？ ……違います」

「では、なぜクラリスにそのような態度を取るのだ？」

「……申し訳ございません」

突然怒り出したアレクシス様にぼかんとしてしまう。さっきまであんなに優しくかったのに、今は女官をにらみつけて叱っている。

「クラリスは俺が連れていく。お前は下がれ」

「っ！ ですが！」

「……礼儀も知らない者を公爵令嬢に付けるわけにはいかない。女官長に申しとおこう。教育が足りないのではないかと」

「それは！ ……私はただ……」

「何度も言わせるな。クラリスは俺が連れていく。下がってよい」

「……わかりました」

先ほどの私を見下すような視線はなくなり、女官は目を伏せて去っていく。その姿が見えなくなつてから、アレクシス様は私に頭を下げた。

「悪かったな」

「え!? アレクシス様が謝られることはありません」

「だが、あれは王宮の女官だ。責任は王族にある」

「……気にしないでください。私は公爵令嬢といっても名前だけです。養女なので、公爵令嬢として扱っていただく必要はありません」

「それは嘘だ。公爵家の養女になったのなら父上がそれを認めている。国王が認めたことに従わないのであれば、この国の身分制度は崩壊してしまうだろう。クラリスは自分を馬鹿にする者を許してはいけないんだ」

「……はい」

「ああ、悪い。クラリスのせいじゃないよな。責めているわけじゃない。ただ、クラリスは見下されるのを当たり前だと思わなくていい」

「……がんばります」

わかりましたとは言えなかった。どう考えても今の状況では無理だと思ったから。それでもアレクシス様の言葉がうれしくて、精一杯笑いかけた。

「それに、アレクと呼べと言ったのを忘れたのか？」

「ア、アレク様」

そう呼んでいいと言われていたけれど、本当に呼んでいいのかわからなくて困惑してしまう。その思いが伝わったのか、アレク様は私の両手をぎゅつと握った。

「俺をアレクと呼ぶせるのはクラリスだけだ……今は助け出せないけれど、大人になったら……」
「アレク様？」

「本当は今すぐにでも公爵家から連れ出したい。だが、俺もまだ子どもだからその力がない。大人

になったらクラリスを迎えに行く」

「……アレク様が迎えに来てくださるのですか？」

「ああ。それまで我慢して待っていてくれるか？」

「はいっ」

いつも公爵家の屋敷にいることに違和感があった。自分だけが異質な存在として扱われているような気がしていた。お母様にもお義姉様にも邪魔者扱いされて、使用人たちにも冷たくされて。どこか違う場所に行きたかったけれど、どこにも行く力がなかった。

初めて会ったアレク様が私のつらさに気がついて、助けようとしてくれるのがうれしくて、ぼろりと涙がこぼれた。

「泣くな。帰せなくなる」

「あ、ごめんなさい」

「謝らなくていい」

両手を握られたままだから、涙を拭けない。どうしようかと思っていたら、アレクシス様が唇で頬に流れた私の涙を拭いた。

「え？」

「……手を離すのがいやで、つい。これじゃあ、拭えていないな」

そう言って、今度は優しくハンカチで拭ってくれる。アレク様の唇がふれたことに驚いて涙は止まっていた。

「ありがとうございます」

「約束は必ず守る。だから、俺のことを忘れないでくれ」

「はい……忘れません。絶対に」

もう一度目を合わせて微笑み合うと、お茶会の場所へと向かう。手をつないだまま歩いていく間、この時間がずっと続けばいいのにと願っていた。

だが、予想通りお茶会の場に戻った私を待っていたのは、お母様からの叱責だった。そして、アレクシス様と会ったのはそれが最後だった。

十六歳になって、私とお義姉様は学園に入学することになった。同じ屋敷から学園に通うというのに、お義姉様とは乗る馬車が違う。私は公爵家専用の馬車ではなく、一回り小さな公爵家の紋章が付いていない馬車で学園へと向かう。

ゆつくりと馬車が止まると、御者の手を借りて降りた。侍女も使用人も付いてこないため、一人で学園内を歩く。

貴族だけが通う学園だが、社交の経験がない私は知っている人がほとんどいない。周りを歩く学生たちに紛れて、校舎へと向かう。

「教室に入る前に掲示板で自分のクラスを確認するように！」

学園の事務員が生徒たちへ叫んでいる。見ると、人が群がっている場所があった。あそこが掲示板に違いない。

人混みの隙間から掲示板に貼られた紙を見て、ため息をつく。予想していなかったわけじゃないけれど、最低のクラスだとは……

この学園では、生徒は成績に応じて上から特別クラス、上級クラス、標準クラス、基礎クラスの四つに振り分けられる。学園に入る前に提出した課題の成績で決まるのだが、私の名前があったのは最低の基礎クラスだった。

いくらなんでもありえない。公爵家なのに最低のクラスだなんて恥でしかない。呆然としていると、後ろのほうから私の名前が聞こえた。

「見て、バルベナ公爵家のクラリス様、基礎クラスだって」

「うそ！ そんなに頭悪いの？ 信じられない。いくら養女とはいえ公爵令嬢なのに」

見知らぬ令嬢たちが私のことを噂している。言われても仕方ないと私も思う。公爵家なら養女でもきちんと教育しているはずなのに、と。

養女の私が最低クラスだということは、お義父様の恥でもある。正式に引き取ったのにお金をかけていない、虐待していると思われかねない。でも申し訳ないと思わないのは、私にはどうにもできないから。

それにしても、こんな場所で大っぴらに公爵令嬢の悪口を言うとは。どこの貴族家の令嬢なのかわからないが、聞かれたら処罰されかねない。私の顔を知らないから、ここにいることに気がついていないのだと思うけど。そう考えていると、違う令嬢たちの声が続く。

「ああ、でもジュディット様はさすがだわ。特別クラスよ」

「本当ね。さすが王女の娘は違うわよね。特別クラスって数名しかいないのでしょうか？」

「ええ。授業を受けるかどうか自由なんですって。特別クラスに選ばれるくらいなら授業なんて必要ないからって」

「すごいねえ。私も一度でいいから特別クラスになってみたい」

「あなたなんて無理よお」

「ひどい！」

今度はお義姉様への誉め言葉だった。私と、先妻の娘である姉のジュディットは一月しか年が離れていないため、学園では同じ学年になる。お義姉様の名前が特別クラスにあることは気がついていなかった。そっか。最高のクラスだったんだ……

きやあきやあとふざけている令嬢の声が遠くなっていく。基礎クラスの教室へと一人で向かう中、誰かに愚痴りたい気持ちでいっぱいになる。

本当は、お義姉様の成績は私のものなのに。

課題を提出する時、魔力を登録した魔石と一緒に提出している。課題を魔力筆で書いているため自分で解いたという証明になるのだが、お義姉様は私の魔石と課題を奪って自分のものとして提出してしまった。

あの時は本当に驚いた。三年間も通うのに私の魔力で登録してしまうなんて。どうしてそんなことをするのかと聞いたけれど……

「だって、課題をするのが面倒くさいんだもの。いいじゃない」

課題を解くのが面倒くさい、それだけの理由で私の成績は奪われた。

学園に間違いだっと思ったけれど、いつの間にかお義姉様の魔石と課題が私のものとして提出されていた。

お母様に訴えても聞いてもらえず、どうしようもできずに入学の日を迎えたのだけど、こんな結果になるのなら嫌だって言ってみればよかった。

本当なら私が特別クラスでお義姉様が基礎クラスだった。でも、それを人に言うことはできない。もし、お義父様に叱られたら、なんて言えはいんだらう。正直に話したとしてもきつと信じてもらえない。だって、私はお義父様の本当の娘ではないもの。

基礎クラスの教室に入ると、座っている生徒は誰もいない。あちこちで数名ずつ集まって、おしゃべりをしてる。

基礎クラスに入るのは、下位貴族の嫡子以外が多い。勉強しても仕方ないと思っっているのか、まともな教育を受けてこなかったかのどちらかだ。その中に高位貴族の私が入るとどうしても浮いてしまう。ちっとも社交をしてこなかったせいもあるけど、誰に話しかけていいかわからなくて席についた。

その日は学園についてや今後の説明だけで授業はなかった。他のクラスは授業をしているのに、基礎クラスの者たちは平気な顔で帰っていく。

このまま帰るのも嫌で図書室へと向かう。誰もいない図書室は静かで落ち着く。読みたかった本を見つけ、つい読みふけてしまう。ずいぶん時間が過ぎていたことに気がついて、慌てて家

帰った時にはもう日が暮れかけていた。

玄関に入ると、お母様が私を待ち構えていた。あきらかに不機嫌そうな顔をしている。

「何をしていたの！ 遅いわよ！」

「ごめんなさい」

「早く帰ってこいと言ったでしょう！」

「……はい」

帰るなり叱られてしまった。本当はもつと早く帰れたはずだから、私が悪いのだけれど。

それでも屋敷に帰ってくるとゆっくりしている時間がない。大好きな本を読みたくても、読んでいる暇がないくらい忙しい。だから久しぶりに本を読み始めたら、楽しくて止まらなかった。

お母様はまだ機嫌が悪そうだったけれど、私を待っていた理由を思い出したのか、それ以上叱ることはしなかった。

お母様が迎えに出てくる時は必ず、私にさせたい仕事がある時。黙ってついていくと、いつものようにお母様の私室の隣、作業部屋に入る。

やっぱりこれなのね。人払いがされていたから、この仕事を押し付けられるんだろうとは予想していたけど。

作業部屋の広い机の上に用意されていたのは大量の原石。大きな木箱に入ったものが二つも置かれていた。

「これが終わるまでは外に出ないように」

「……はい」

「何よ、その不満そうな顔は！ これができないと私は公爵家を追い出されるかもしれないのよ！ その時は養女で血のつながりが無いあなたも一緒に追い出される。今さら平民になって生きられるとでも思っているの!？」

「思っていないわ……ごめんなさい」

「わかったならいいわ。しっかりやりなさい」

パターンとドアが閉められて、ため息をついた。これが終わるのはいつになるだろう。魔石作りは、貴族家の重要な仕事だ。それはわかっているけれど。

原石に魔力をこめて魔石とするのだが、普通はこんな量の原石に一人で魔力を込めることはできない。

魔力を使い切れば疲れて動けなくなる。私なら使い切ることはないけれど、それでも疲れることに違いはないのに。

この国で魔石が使われるようになったのは、それほど昔じゃない。つい十年ほど前からだ。隣国から魔術具が入ってきて、王都に結界が張られるようになったのもその頃から。魔獣は結界を通ることができず、王都の安全は守られている。

だが、結界を張り続けるには大量の魔石が必要で、伯爵家以上の貴族家は爵位ごとに決められた量の魔石を納める義務があった。当然、筆頭公爵家のバルベナ公爵家は一番多く納めなくてはならない。

本当なら、公爵であるお義父様と公爵夫人のお母様がするべき仕事だけど、お父様は公爵領の経営と宰相としての仕事が忙しくて、ほとんど家に帰ってこない。公爵夫人といつても、元は伯爵夫人だったお母様は魔力が少なく、バルベナ公爵家が納めなくてはいけない量の魔石を作ることには不可能だった。

そこで養女だけど魔力が多い私の仕事となったのだが、表向きはお母様とお義姉様^{ねえ}がやっていることになっている。

いくら理不尽だと考えていてもやらなければならないことには変わらない。あきらめて、ひんやりとした魔石を一つ手に取る。

「冷たい。どれくらい時間がかかるかな……」

指先から魔力を流すと原石に吸い込まれていく。魔石が完成すると魔力の流れは止まった。

最初に魔石作りをさせられた時は五歳だったから、一つ作るのにも時間がかかった。それが慣れてくると一つを作る時間は短くなったけれど、どうしてなのか魔石の量が年々増やされている。

今では月に三度ほど、この仕事をさせられていた。最初の頃に比べたら魔石の量は数十倍にもなっている。

養女なのだから、後妻の連れ子なのだから、役に立たなければ追い出される。それはわかっているのに、嫌だと言ったことはない。

それでも、食事でもできずに作業部屋に閉じ込められると、どうして私だけこんなつらい思いをしなければいけないだろうと悲しくなる。

結局、すべての魔石が完成したのは夕食がとくに終わった時間だった。私の部屋に食事が届いてなかったたので、厨房^{ちゆうぼう}まで取りに行く。残っていたのはスープとパンだけだったけど、ないよりはましだ。

部屋まで自分で運んでいこうとしたら、厨房^{ちゆうぼう}の者が小声で文句を言っているのが聞こえてしまった。

「つたく、食事はいらないうって言ったり、いるって言ったり、クラリス様はわがままんじゃないのか？」

「しつ。聞こえるよ！」

「聞こえたって咎められないだろう。奥様がクラリス様には厳しくしていいって言っているんだ」それはそうだと思う。こんなことをお母様に言ったとしても咎められはしない。

食事をいらないと伝えたのは、私付きの侍女の誰かだ。私が仕事をしている時は自分の部屋にいることにされている。侍女たちは私が何をしているのかは知らされていないが、お母様がそうするように指示したのだろう。

お母様は私に身のほどを弁えさせるために、けつして優しくしない。公爵家の跡取りであるお義姉様のことは大事にして、私のことはどうでもいいという扱いをする。

それを見ている使用人たちも同じように、お義姉様^{ねえ}は大事にして、私はぞんざいに扱う。それも身の差を考えたら仕方ない話ではあるけど。

部屋に戻って、食事を終えらともう寝る時間だった。着替えて寝ようとした時、綺麗な金髪をく

るりと巻いた夜着姿のお義姉様ねえがノックもせずには部屋に入ってきた。侍女も付けずに一人で来たらしい。

「クラリス、起きてるわよね」

「お義姉様ねえ、どうしたの？」

こんな夜にどうしたのかと思ったら、手に何か持っている。

「これに刺繍ししゅうしておいて。そうね、白い小花がいっぱいの柄がいいわ。とっても可愛らしくしてね」

「刺繍？」

渡されたのはハンカチだった。三枚もある。

「明日までによろしくね」

「明日なんて無理よ！ 三枚もあるのよ」

「だって、明日渡したいんだもの。お友達になった記念に渡すの。時間がたってしまったら意味ないじゃない。そのくらいやってくれるわよね。居候いそうこうなんだから。少しは私の役に立とうと思わないの？」

それは思ってる。思っているから、お義姉様ねえのわがままを聞いてきた。

「……わかったわ」

「じゃあ、明日の朝に取りに来るわね」

お義姉様ねえはにっこり笑って出ていった。これから三枚も……寝ずにやれば終わるかもしれないけれど、魔石作りを終えたばかりで全身くたくたに疲れている。

「……やらなかったら、機嫌が悪くなるのよね」

やりたくはない。でも、やらなかった時のことを考えてあきらめてハンカチを手にする。

お義姉様ねえは言うことを聞いていれば機嫌がいい。機嫌が悪くなると暴れ出して手に負えなくなるから、できるかぎり願いを叶えなくてはいけない。

今日は眠る時間がなさそうだと覚悟を決めて、針に糸を通す。集中して針を刺している間に時間はどんどん過ぎていく。

三枚目のハンカチの糸を切った時には、もう明け方になっていた。でき上がったことにほっとしながら、ほとんど寝る時間がないことになりがっかりする。それでもソファに座ったまま、目を閉じた。ハンカチを取りに来たお義姉様ねえはお礼も言わずに持っていた。それもいつものことだけど、寝不足の頭が少し痛む。時間になってしまったので朝食をとるために食堂へと向かう。

食事の席では、いつもお義姉様ねえとお母様が話している。金髪のお義姉様ねえと薄茶色の髪のお母様。髪色は違うのに、目の色は同じ緑色で顔立ちもなんとなく似ている。

私も目の色は緑色だけど髪は濃い茶色で、亡くなったお父様に似たのか、あまりお母様に似ていない。こうして仲良く話している二人を見ると、お母様と血が繋がっているのはお義姉様ねえのようだと思う。

お母様が再婚した時、お義姉様ねえはまだ生後二か月だったから、お義姉様ねえにとってもお母様が本当の母親みたいなものだった。実際、私には感じられない母親の愛があるように思うのは、優しくしてもらえない私の僻みひがみなのかもしれない。

「お義母様、アレクシスとラファエルの婚約者候補選びが始まるって本当？」

「あら。王妃様からは何も聞いていないの？ お二人とも十八歳になるから、そろそろ始まるはずよ」「本当だったのね。昨日、お友達から聞かれて驚いたわ。どうしてお茶会の時に教えてくれなかったのかしら」

第一王子と第二王子の婚約者候補選びが始まる……お二人とも学園の三年だったはず。学園の卒業までに正式な婚約者を決めるのかもしれない。

「ふふ。きっと求婚されて驚くジュディットが見たいのね」

「そうかもしれないわ。ねえ、どっちを選べばいいと思う？」

「ジュディットはどちらがいいの？」

「そうねえ。仲がいいのはラファエルだけど、アレクシスも素敵なのよね。いつも照れてるのか、あまり話してくれないんだけど」

アレクシス様……あれからもう九年になる。成長したアレクシス様はどれほど素敵になっているだろうか。あの日のことを想うと胸が温かくなって、頬にふれたアレクシス様の唇を思い出しては恥ずかしくなる。迎えに来てくれる約束をアレクシス様は忘れてしまったかもしれないけれど、私は忘れていない。

それなのに、アレクシス様がお義姉様と婚約するかもしれない……ずきりと痛む胸のうちを顔に貼らないように食事をする。

「どちらが王太子になるのかはまだわからないのよね。妃次第じゃないかと言われているみたいだ

けど」

「じゃあ、私が選んだほうが王太子になるのね！」

「そうだと思うわ。ジュディットよりも優れた令嬢なんていないものね」

「どうしようかしら。迷ってしまっわ」

もうすでに王子二人に求婚されると確信しているお義姉様と、お義姉様こそ王太子妃にふさわしいと笑うお母様。確かに血筋と家柄で敵う令嬢はいないと思う。

お義姉様の母は亡くなった前公爵夫人、王妹だったシャルリーヌ様だ。陛下は大層可愛がついてたそうで、遺されたお義姉様のことも大事にしているらしい。

お義姉様は王妃様や王子たちとも仲がよくて、まるで王女のように可愛がられている。王妃様とお茶会をするからと、そこでお渡しするハンカチに刺繍を頼まれたこともある。公爵令嬢として社交をしなければいけないお義姉様は忙しい。だからこそ、私が支えなくてはいけないのはわかっている。

だけど、もしお義姉様が本当に王太子妃になるのだとしたら。勉強も刺繍も人任せで、大丈夫なのかと心配になる。私もそのうちどこかの家に嫁ぐ。その時、自分で何もできなかったらお義姉様は困ると思う。もう一度、きちんと話をしたほうがいいのかもしれない。

眠たい目をこすりながら、学園に向かう馬車に乗る。お義姉様と乗る馬車は別だから馬車に乗っている時は無理に笑わなくていい。

学園に着くと、知らない令嬢たちから冷たい目で見られる。……私が何かしたのだろうか。

「ほら、あの人だわ。ジュディット様の義理の妹って」

「素行が悪いって本当かしら？」

「本当なんじゃない？　だって、基礎クラスだという話だし」

え？　私の素行が悪い？　そんな噂が流れているとは知らず、話をしていた令嬢たちのほうを見てしまう。私に聞こえていたとわかったからか、令嬢たちは気まずそうな顔をして去っていった。

どういふことなんだろうと思いつながら、誰かに聞くこともできない。唇を噛みしめつつ、基礎クラスの教室へと向かった。

学園に入學して二週間。

お義姉様は楽しそうに通っている。一度特別クラスの学生たちがお茶をしているのを見かけたが、特別クラスの令嬢はお義姉様だけで、令息三人に囲まれて笑っていた。その一方で、基礎クラスに通う私は困り始めていた。

私はお義姉様が特別クラスで出された課題をするけれど、お義姉様は私に出された基礎クラスの課題をしてくれない。

魔石を交換して登録しているため、私自身が課題を解いて提出することはできない。だからお義姉様をお願いしているのに、お義姉様は面倒くさいから嫌だと一度も課題をしてくれない。

「課題をするのが嫌だから魔石を交換したのに、クラリスの課題をするわけじゃないじゃない」

「でも！　それじゃ困るの。私はずっと課題を提出できないことになってしまうわ」

「課題なんて提出しなくても退学にはならないわよ。公爵家なんだから、学園は文句を言えないもの」「そういうことじゃなくて！」

いくら公爵家の養女であっても、課題を出さなくていいわけではない。退学にはならなくても、教師から毎回注意をされるし、教室で注意されるたびに他の生徒から冷たい目で見られる。

「やっぱり今からでも魔石が違いましたって言えば」

「馬鹿なの？　そんなこと言えるわけじゃないでしょう？」

「でも」

「クラリスは私に基礎クラスに行けって言っているの？　王太子妃になる私に最低クラスに行けと？」

そうじゃないけど、これは間違った状態だ。こんなことをずっと続けていていいわけがないのに。そう言いたかったけれど、お義姉様の機嫌を損ねたことに気づいて黙る。でも、遅かった。お義姉様は飲んでいたお茶を私の顔へとかける。熱くはなかったけれど、服までお茶で汚れてしまった。

「もし、このことがバレてみなさいよ。公爵家の信用はなくなつて、私は王太子妃になれなくなるかもしれない。その時はクラリスには責任を取つて家から出ていってもらうわ」

「そんな……」

「だって、そのくらいしか責任を取る方法はないでしょう？　役にも立たない居候なんて邪魔でしかないわ」

「でも……いつまでもこんな不正を続けるわけにも。私がいなくなった時にお義姉様が大変なこと

になるのに」

ずっとお義姉様に言われるまま動いてきた。それがお義姉様の評価を高めていることは知っている。いつか、私が代わりをできなくなった時、お義姉様はどうなってしまうのか心配だ。

「クラリスがいなくなる？ どうして？」

「え？ だって、私がどこかに嫁いでしまったら、お義姉様の手伝いはできなくなるでしょう？」

「ふふっ」

本当に心配でそう言ったのに、お義姉様は笑い出した。

「どうして笑うの？」

「クラリスはどこにも嫁がないわよ」

「え？」

「どこにも嫁がずに、ずっと私のために働くって決まっているの。クラリスも言ってたじゃない。いなくなったら私が困るのよ。だから、一生私のために生きてもらうわ。お義母様もそうするって言ってたわよ？」

「……うそ」

「嘘じゃないわ。公爵令嬢を名乗らせてあげているんだから、そのくらいの恩返しするのは当然でしょう？」

「そんな……」

お義姉様はそれ以上取り合ってくれなかった。本気で私をどこにも嫁がせずにお義姉様のために

働けというの？ あまりにもひどいと思ってお母様に訴えたけれど、答えはお義姉様と同じだった。

「あら。そんなの当たり前じゃない。まさか、どこかに逃げるつもりだったの？」

「逃げるって」

「あなたは公爵が拾ってくださいならなかったら、その辺で平民として野垂れ死にしていたのよ？ 一生かけてジュディットにお仕えするのは当然でしょう」

「……でも」

「口答えは許さないわよ！ 今日食事は抜きで反省しなさい！」

「……はい」

お母様が再婚しなかったら死んでいた。それはそうだけど。

お母様はお義父様と再婚する前、モデュイ伯爵家に嫁いでいた。だが、私を産んで二週間で夫の伯爵令息は亡くなってしまったため、モデュイ伯爵は亡くなった長男に代わり、二男を後継ぎとした。そして、二男にはもうすでに妻と息子がいた。亡くなった長男の妻と娘は不要になり、生家のマイエ伯爵家に戻そうとしたが、マイエ伯爵家はお母様の従兄弟が後継ぎとなっていて、生家にも戻れなかった。

途方に暮れていたお母様を救ったのが、元王女の妻を亡くし、まだ生後一か月だったお義姉様の新しい母親を探していたバルベナ公爵だ。公爵は再婚しても子どもは作らず、娘を母親として大事にすることを条件にしてお母様と再婚した。当時、お義姉様は生後二か月、私は生後一か月。それから家族として暮らしてきた、つもりだったのに。

あくまでも私は居候^{いざうろう}で、お義姉^{ねえ}様の役に立つことでここに置いてもらっている。それを当然だと受け止められない私が悪いのだけど、どうしようなく落ち込んでしまう。

いつか、バルベナ公爵家から出る時には、人並みの幸せを手に入れられるかもしれないと思ってた。私を家族として愛してくれる人に出会えるかもしれないと。アレクシス様が迎えに行くと言ってくれた言葉を信じているわけではないけれど、あの時の約束があるから生きていられた。でも、もうそんな可能性は消えてしまった。

ここから逃げ出すことはできないんだと、部屋に戻ってただ泣き続けていた。

2

どこにも逃げられないと絶望しても、朝が来れば起きなくてはならない。つらい学園生活も気がつけば二か月が過ぎていた。いつものようにお義姉^{ねえ}様の課題などをこなし、魔石に魔力をこめる。言われるままに働いていると夕食の時間になった。

夕食の時間はお母様がお義姉^{ねえ}様に学園での出来事を質問して、お義姉^{ねえ}様が楽しそうにそれに答える。ずっと二人が話しているのを聞きながら食事をするのにも慣れた。私が口を挟めば叱られるのはわかっているので黙っている。

「それでね、アレクシスとも仲良くしてあげようと思って、昼休みに学生会室へ行ったの！」

その名前を聞いて、ついお義姉^{ねえ}様の顔を見てしまう。お義姉^{ねえ}様はそんな私には気がつかずに、お母様へ視線を向けている。

「学生会室？」

「アレクシスは学生会長なのよ。ラファエルとはカフェテリアでお茶しているけど、アレクシスは来ないの。アレクシスともゆっくり話したいのに、学生会が忙しくて時間がないっていうから、じゃあ、私が学生会室に訪ねていつてあげようって思ったの」

「ジュディットは優しいのね」

「でしょう？　なのに、アレクシスったら、学生会室は関係者以外は入れないからって断ったのよ！　せっかく行ってあげたのに、信じられないわ！」

今日は帰ってきた時から少し不機嫌だとは思っていたけど、アレクシス様に断られたせいだったんだ。学生会室に行く用事はないけれど、関係者以外立ち入り禁止なのは覚えておこう。

学生会長のアレクシス様にも私の悪評は届いているはず。これ以上何かして嫌われたくないもの……

「アレクシス様が学生会長ねえ。やっぱり優秀なのはアレクシス様のほうなのね」

「成績はそうみたいね。きつと、真面目だから勉強ばかりしているんだわ。少しはラファエルみたいに社交的になればいいのに」

「そうね。国王になるには社交も必要だわ。仕事は臣下に任せればいいのだから」

「そうよ。仕事なんて誰でもできるんだもの」

それはどうなんだろう。仕事自体は臣下に任せてもいいだろうけど、最終的に判断するのは国王の仕事だ。少なくともお義姉様^{ねえ}が言うように、誰にでもできるような仕事ではないと思う。

優秀で冷静な第一王子のアレクシス様。明るくて社交的な第二王子ラファエル様。この国は側妃の制度がないため、三人の王子は全員が王妃の息子。アレクシス様とラファエル様は双子のため、まだどちらが王太子になるのかわからない。おそらく学園を卒業する時に決まるだろうと言われている。

ラファエル様が社交的だからという理由だけで国王に向いているとは思えないけれど、学園での成績はどうなんだろう。学園の三年にいるのは知っているけれど、私には友人がいらないから噂話^{うわさ}も入ってこない。こうしてお義姉様^{ねえ}の話聞かなければ、アレクシス様が学生会長なのすら知らなかっただろう。

話す機会はないと思うけれど、アレクシス様が卒業するまでに学園ですれ違うことくらいできないだろうか。忘れないでと言ったのはアレクシス様だけど、たった数時間だけ一緒にいた私を覚えてくれているわけではない。あれから一度も会えていないのだから。でも、もしも覚えていてくれたなら……

そんなことをぼんやり考えていた私に、お義姉様^{ねえ}は思い出したかのように言う。

「ああ、クラリス。明日から学園を休んでね」

「え？」

「ほら。来週から学期末試験があるでしょう？ 休めば課題提出になるから、私も休むんだけど、

その日だけ休んだら怪しまれるでしょう？」

「試験を休む？ どうしてなの？」

「学園で試験を受けたら魔石を交換したことがバレちゃうでしょう？」

こんな簡単なこともわからないのとばかりの呆れた顔でお義姉様^{ねえ}が言う。そうか。学園の教室で試験を受けてしまったら、魔石を交換していたことが知られてしまう。

だから試験中は休んで、後日課題を提出すればいいというのはわかるけど、それが上手くいくとは思えなかった。

「お義姉様^{ねえ}、学期末試験って年に四度もあるのよ？ 何度も休んでいたら疑われるんじゃないの？」

「公爵家を疑うようなこと、教師ができるわけじゃないじゃない」

「……大丈夫なのかしら」

「大丈夫に決まっているわ。ああ、クラリスが風邪をひいてしまったから、看病してあげた優しい私にもうつった、つてことにするから。よけいなことは言わないでよね」

「……………わかったわ」

そんな不正はしたくないと言いたかったけれど、お義姉様^{ねえ}の隣に座るお母様ににらまれて、受け入れるしかないときらめた。

次の日から、学期末試験が終わるまで休んで、ようやく学園に行けるようになった日。基礎クラス^{基礎}の学生だけじゃなく、他のクラスの学生の目も冷たかった。どうやら私が夜遊び^{うわさ}していて風邪をひき、お義姉様^{ねえ}にうつしたと噂^{うわさ}になっているようだ。広まってしまった悪評はどうしようもないけ

れど、それから令嬢たちにたびたび呼び出されることになった。

その日も令嬢たちに呼び出されていた。教室のすみで昼食をとっていたら、一人の令嬢についてくるように言われ、中庭まで連れていかれる。

そこにいた令嬢たちは四人。私を連れてきた令嬢と合わせて五人。同じクラスではないけれど、見たことあるから同じ学年だと思う。

どこの貴族家なのかは知らないけど、同じ学年に公爵家の令嬢はいなかったはず。そうすると侯爵家以下の令嬢たちということになる。私のほうが身分は上なのに、令嬢たちがそれを気にしている様子はない。全員が私に腹を立てているようだ。にらみつけられ、周りを囲まれる。

「クラリス様、いい加減にしてください」

「もっと真面目になってください。公爵令嬢が最低の基礎クラスにいてだけでも恥ずかしいというのに、課題を一度も出していないじゃないですか！」

「しかも、夜遊びまでしてジュディット様を心配させて！」

「ジュディット様に看病までさせるなんて、ありえません！ 王太子妃になる方なのですよ!？」

もう何度もこういう呼び出しをされているから慣れてはきたけれど、何も言い訳できないのはつらい。ついでに言えば、身分だけは公爵令嬢の私が、伯爵以下の令嬢たちに頭を下げるわけにはいかなかった。養女だとしても公爵家の名を傷つけることは許されない。そんなことをしてしまえば処罰を受けるのはこの令嬢たちのほうだ。お義姉様^{ねえ}のために怒っているのだろうけど、少しは冷静

になってくれないかな。

言いたいだけ言えばちよつとはすつきりするだろうか。終わるまで黙って聞くことにしたけれど、それが悪かったらしい。何も言わない私に令嬢の一人が腹を立て、ぐつと髪をつかんだ。

「痛いっ」

「ちゃんと聞いているんですか！」

「やめて！ 手を離して！」

「これから真面目になると約束してくれなければ、この手は離しません！ ジュディット様にもう迷惑をかけないでください」

そんな約束をできるわけがない。だって、夜遊びなんてしたこともないし、課題だって特別クラスのを毎日している。していないのは、真面目じゃないのはお義姉様^{ねえ}なのだから。

でも、それを言えるわけもない。すると、別の令嬢に突き飛ばされ、地面に倒れた私に令嬢たちが近づいてくる。

何をされるのかわからず、怖くて身を縮める。どうしよう。大きな声で助けを呼ぶべき？ いや、そんなことをすれば大騒ぎになってしまう。

「お前たち、何をしている」

突然聞こえた低い男性の声に驚いて、令嬢たちが声のしたほうを向いた。

「え？ 王子殿下!？」

「嘘でしょう!」

「公爵令嬢に何をしていると聞いた。答えろ！」

王子殿下……？ 顔を上げたら、令嬢たちの後ろに男性が立っていた。長い銀髪の間隙から見える、咎めるような青い目。あの時とは身長も体格も違うけれど、綺麗だからこそ冷酷な印象を与える表情は変わっていない。

ああ、アレクシス様だ。こんな恥ずかしいところを見られるなんて。すぐに立ち上がるうとしたけど、右足首に痛みが走る。

「……痛っ」

「怪我をしたのか！ お前たち、どう責任を取るつもりだ！」

「いえ！ 怪我をさせるつもりなんてなかったのです！」

「そうです！ クラリス様に真面目になってほしいと訴えていただけで！」

「ええ、ジュデイト様に迷惑をかけないでほしいとお願ひして！」

自分たちは悪くない、ただ少しだけ熱意がありすぎただけだと令嬢たちが口々に訴える。

「これは王太子妃になるジュデイト様のためで」

「この国の未来のために呼び出したのです！ わかってもらえますよね！」

本気で自分たちは悪くないと思っているのか、令嬢たちは平気な顔で言い訳を続ける。アレクシス様はその言い訳を途中でやめさせると、冷たい表情のまま令嬢たちに告げた。

「言い訳はいらない。お前たちが暴力沙汰を起こしたことは変わらない」

「「「「え？」」」」

「この学園の学生は全員の顔と名前を覚えている。当然、お前たちがどこの貴族家なのかも知っている。処罰が決まったら当主へと連絡する。わかったら教室へ戻れ」

「そんな！」

「お考え直してください！」

「学生会長として、この件を見逃すことはできない。王家からも処罰されなくてはならぬ。今から立ち去れ。これ以上反論する気なら、学園内だけの処罰では済まさないぞ」

今なら学生としてのもめ事で済ませると警告され、令嬢たちは肩を落として去っていった。五人のうち二人はまったく反省していないのか私をにらんでいたが、恨まれたところでどうすることもできない。もう私に関わらないでくれるようにと祈るだけだ。

令嬢たちが去ると、アレクシス様が私のほうへと近づいてくる。その顔はさっきまでの冷たい表情とは違って心配そうな色が浮かんでいた。

「クラリス、大丈夫か？ どこを怪我したんだ？」

アレクシス様から名前を呼ばれ、私を覚えていてくれたことがうれしくて泣きそうになる。それをアレクシス様は痛みによるものだと思ったのか、痛ましそうな顔で私のそばに跪いた。

「あ、あの、足をひねってしまったみたいですが大丈夫です。助けてくださってありがとうございます」

「足か……」

アレクシス様は少し考えるようなそぶりをした後、座り込んだままの私を抱き上げた。



「ええ？」

「このままにしておくわけにもいかないし、事情を聞く必要がある。学生会室に連れていくから、おとなしくしていてくれ」

アレクシス様に抱き上げられ、混乱して頭の中がぐるぐると回り出す。もう近づくことはできないと思っていたのに、すぐそばにアレクシス様の顔が見える。抱き上げられた腕や寄りかかる身体から体温が伝わってきて、どうしたらいいのかわからず身を固くしていると、近くの建物の中へと入っていった。

今まで立ち入ったことがない棟の奥の部屋の前でアレクシス様は止まる。学生会室と書かれた大きな扉をアレクシス様が足でノックすると、中から一人の令息が出てきた。

「その令嬢はどうしたんですか!？」

「怪我人だ。事情を聞くために連れてきた」

学生会室の内装は教室とはかなり違っていて、まるで公爵家の客室のような豪華な造り。関係者以外立ち入り禁止だとお義姉様^{おねえ}が言っていた。連れてこられたとはいえ、私が入っているのだろうか。アレクシス様が私をゆっくりとソファへ降ろしてくれる。すると、先ほどの令息が何かを手にし

て戻ってきた。

「アレクシス様、持ってきました」

「ああ」

令息が持ってきたものはなんだろう……小さな箱にひものようなものが何本もついている。おそ

らく魔術具だと思っけれど。

「すぐに治療する。痛むのはどっちの足だ？」

「あ、右足首です」

「……悪いが、ふれるぞ」

返事をする前に、アレクシス様の手が足首へとふれる。痛みもあつて身体がびくりと動いてしまう。
「痛むか……少しだけ我慢してくれ」

「……はい」

少しずつ痛みが薄れていく。この魔術具は治療具だったんだ。今まで怪我をしたことがないわけじゃないし、公爵家にもあると思うけど、私に使われたことはないせいでわからなかった。私なんか魔石を使うのがもったいないからだと思う。

痛みが引いていくと、アレクシス様にふれられているのがただただ恥ずかしい。アレクシス様もそれがわかっていいのか、足を見ないようにしてくれている。

「もう、大丈夫か？」

「はい。痛みはなくなりました。こんな高価な魔術具を使わせてしまつて申し訳ありません。助けただいてありがとうございます」

治療が終わると、アレクシス様は向かい側のソファに座った。少し距離が離れてしまったことをさみしく感じてしまい、これ以上は望んではいけないと自分に言い聞かせた。

「クラリス、さっきの状況を最初から説明してくれるだろうか？」

「……はい」

どうして令嬢に囲まれていたのかを説明するには、私の悪評についても説明しなければならない。そういう人だと思われたくないけれど、説明しないわけにもいかない。

仕方なく教室から連れ出されたところから説明を始めたら、先ほどの令息が私の話を書き留め始めた。もしかして、これはどこかに報告されるんだろうか。

アレクシス様は私の話が終わるまで黙つて聞いていたけど、なぜか隣国クルナディア王国の言葉で話し出した。

『今日の件は公爵家に報告したほうがいいか？』

「え？」

『言われたら困るのなら、あの令嬢たちは軽い処分にして、公爵家には言わないでおくこともできるが、どうする？』

どうしてクルナディア語なのかはわからない。ふと、後ろにいる令息が慌てているのが見えた。もしかして、令息はクルナディア語がわからないから、内緒で彼女たちの処罰を軽くしてくれるってこと？　じゃあ、私もクルナディア語で話したほうがいいのかもしれない。

『できるのなら、そうしてください』

『あの令嬢たちに恨みはないのか？』

『困ってはいましたけど、恨むほどではないです。あの令嬢たちは、私に真面目になつてほしかっただけだと思います』

『公爵令嬢にあんな真似をして許されるとでも?』

それは困る質問だ。確かに身分が上の令嬢にあんなことをして許されるわけがない。それを許したら、この国の身分制度が崩壊してしまう。だけど、私はそこまでする必要はないと思った。

『私は本当の公爵令嬢ではありません。母が再婚して養女にしていただけですから』

「そうか。マルス、これでわかっただろう?」

「……はい。そうですね。アレクシス様が正しいようです」

何を言っているんだろうと思っていると、令息が立ち上がって私へと頭を下げる。長い金髪を後ろに一つで結び、眼鏡の奥の目は緑色。よく見れば、お義姉様と同じ王家の色……

「ど、どうしたのですか?」

「今まで誤解していて申し訳ありません」

「え?」

「クラリス、こいつは副会長のマルス。オダン公爵家の三男だ」

「マルス・オダンです」

「あ、あの、クラリス・バルベナと申します」

突然挨拶をされて驚いたけれどオダン公爵家の人だったとは。先代のオダン公爵が王弟だったはず。

この国に公爵家は三つある。筆頭公爵家のバルベナ家。王妃の生家であるモーリア家。そして、騎士団長のオダン公爵家。

モーリア家とオダン家に令嬢はいないし、どちらの家も嫡男はすでに結婚している。そのため、お義姉様とお母様の会話にもほとんど出てこない。三男のマルス様が学園に在籍していたことも知らなかった。

「今日の件は内密に処罰しておくよ。次に同じことをしたらただでは済まさないけど」

「はい、ありがとうございます」

大騒ぎにならずに済んでホッとする。こんな話がお母様たちに知られたら、叱られるのは私のほうだと思う。もっと上手くあしらいなさいと言われるに違いない。

「ただ、クラリスにお願いがあるんだ」

「お願いですか?」

「ああ。実はもう少ししたらクルナディアから留学生が来るんだ。留学してくるのは第二王子だが、少し変わり者らしい。うちの国に来て学ぶことなんてないと思うんだがな」

アレクシス様がそう言うのも当然だろう。隣国のクルナディアは高度な魔術を操る魔術師が多く、魔術具を作る職人も豊富にいる。

我が国、ラデュイルでは作り出せなかった結界を張る魔術具。それを作り出したのがクルナディアだ。大国のクルナディアとの国力の差は歴然としており、何を学びに来るのかと不思議に思う。

「しかも王子だけではなく公爵令嬢も来るそうなんだ。案内役としてクルナディア語の通訳ができそうな令嬢が必要だが見つからなくて、クラリスに頼みたいと思っている」

「私ですか?」

さっきのクルナディア語はのために試していたんだ。しまった……話してはいけなかった。私が基礎クラスにいることをおかしく思われてしまう。さーっと血の気が引いていく。座っているのに、くらりとして倒れそうになったら、すかさずアレクシス様が隣に座って支えてくれた。

両手を包み込むようにされ、アレクシス様の体温が伝わってくる。じんわりと心に伝わってくる熱に、動揺していた気持ちが少し落ち着く。

「クラリスを困らせるつもりはない。クルナディア語が話せるのを知られたら困るのだろう？」

「……はい」

「クラリスが困らない状況になるまで、言うつもりはない」

困らない状況になる？ どういうこと？

「俺は、お前を困らせることはしない。約束しただろう？」

「アレクシス様……」

「呼び方が違う。俺はお前には許したはずだ。忘れるなど言っただろう？」

「……アレク様」

忘れてなんていない。八年前、王妃の庭でアレクシス様に会った時、そう呼ぶことを許された。でも、もう二度と話せないと思っていた。またこんな風に手をつなげるなんて……

「申し訳ありませんが、アレクシス様、俺がいることを忘れないでください」

「ああ、悪い。クラリス、もう授業が始まる。教室に戻ったほうがいい。改めて連絡するから待っていてくれ」

「……わかりました」

マルス様がいるのに、アレク様と手をつないで見つめ合ってしまった。なんて恥ずかしいことをしてしまったのかと、慌てて立ち上がる。

急いで基礎クラスの教室へ向かったが、もうすでに授業は始まっていた。だが、令嬢たちに呼び出された件を知っているからか、こちらを見る学生たちはくすくす笑っているだけだった。

さっきあったことは本当だったんだろうか。またアレク様に会えるんだろうか……期待した後で裏切られたらもつとつらくなるのはわかっているのに、それでも信じたいと思うってしまう。アレク様にふれられた足がまだ熱を持っているような気がした。

アレク様に再会してから三週間が過ぎ、何も音沙汰がないことに不安になり始めていた。あれはやっぱり何かの間違いだったのかもしれない。

夕食時、イライラしているのか、お義姉様ねえがフォークを雑に置いた。ここしばらくお義姉様の機嫌が悪い。

「ねえ、お義母様かあ。まだどちらからも求婚してこないのだけど、いい加減遅すぎると思わない？再来週には誕生日なのよ？」

「そうねえ。誕生日には発表になると思っていただけ、もしかしたらお二人でけん制し合っているのではないかしら？」

「二人が私を巡って争っているってこと？」

「きつとそうに違いないわ」

「もう。そんなことしなくても、選ぶのは私なのに」

そう言いながらも悪い気はしないのか、お義姉様の機嫌は直ったようだ。

やっぱりアレク様もお義姉様に求婚するのかな。そう考えたら、胸が痛くなった。最初に婚約者候補選びのことを聞いた時はあきらめていたからか、こんなにも痛くなかったのに。会えてしまつたせいで、私がアレク様の隣にいたいと願ってしまう。そんな未来はありえないとわかっていても、食事室のドアがノックされ、家令のカールが入ってきた。食事室に入ってくるなんてめずらしいと思つたら、手に何かを持っている。

「ジュディット様、奥様、お食事中に失礼いたします。王宮から書簡が届けられました」

カールが持っていたのは美しい塗箱だった。その中に王家からの書簡が入っているらしい。それを見たお義姉様がうれしそうな顔で席を立てて受け取る。

「やっと来たのね！ でも、手紙での求婚なんて面白くないけど」

「面と向かつて求婚するのは恥ずかしいのよ。開けてみたら？」

「ええ」

塗箱を開けると、そこには手紙が一通入っていた。

「一通だけなの？」

「あら。どちらの王子かしら？」

お義姉様が開いた手紙をお母様も覗き込む。私も内容が気になるけれど、黙って待っていた。手

紙を読んだ二人の顔色が変わっていく。

「……何よ、これ」

「どういふことなの！ カール！」

「ど、どうかいたしましたか？」

「これは誰宛に届いたの!？」

「え？ あの、バルベナ公爵家令嬢宛でございました。ですので、ジュディット様だと思つたのですが、違いましたか？」

手紙を持ったまま、わなわなと震えていたお義姉様が、急にこちらを向いたと思つたら私に手紙を投げつけてきた。

腕にぶつかったけれど、痛くはない。落ちた手紙を拾おうとしたら、その手をぱしんと振り払われた。

「なんでよ！ なんでクラリスが求婚されるの！」

「え？」

「いつの間にアレクシスと会っていたのよ！」

「……どういふこと？」

落ちた手紙を拾い上げて読んでみたら、私を第一王子アレクシスの婚約者候補とすると書かれていた。

「……きゅ、求婚なんてされていないわ」

「じゃあ、どうしてなのよ!」

怖い顔をしたお義姉様とお母様に詰め寄られても、私にもどうしてなのかわからない。

「許せない……どうして求婚されたのが私じゃないの? おかしいわよ!」

「そうよ。どうしてジュディットではないの? クラリスが求婚されるわけがないわ。……ジュディット、大丈夫よ。これは何かの間違いなんだわ」

「お義母様……本当?」

「ええ、大丈夫。万が一がないように、クラリスはすぐに嫁がせましょう。分家のダニエルの後妻にでもすればいいわ。そうすればアレクシス様からの求婚を受けることなんてできなくなるもの」私を分家のダニエルの妻にする? ダニエルって家に愛人を住まわせているとかで妻が逃げてしまった人。そんな人の後妻にされるなんて。

「お母様! 私はそんな人の妻になるのは嫌よ!」

「うるさいわね! とりあえずダニエルの妻にして、王家に嫁がない身体にしてからこの家に戻せばいいわ。あなたはずっとジュディットのために働くて決まっているのだから。カール! クラリスを閉じ込めておいて! すぐにダニエルを呼んでちょうだい!」

「お母様! どうしてそんなひどいことを!」

「黙りなさい!」

あまりのことに驚いてお母様にすがりつくようにして叫んだら、左頬をぶたれた。その勢いで床に倒れた私を、使用人たちが引きずって部屋へ連れていこうとする。

「やめて! 離して! お義姉様! 助けて!」

「ふん……いい気味だわ。クラリスのくせに私を出し抜こうとするからよ」

「そんな! お義姉様!」

お義姉様に助けを求めても冷たい目で見られ、無理やり廊下へ連れ出され、そのまま窓のない部屋へと押し込まれる。向こう側に物を置かれたのか、ドアを押してもびくともしない。

「そんな……ひどい。アレク様……私はどうしたら」

つぶやいても助けが来るわけがない。お母様は本気だった。ここに分家のダニエルが来たら、私はどうなってしまうのか。想像したら身体の震えが止まらなくなった。どこか隠れられないかと部屋の中を見回したけれど、そんな場所は見つからない。部屋のすみで小さくなって、助けが来ないかとそればかりを考える。

「アレク様……助けて。私、他の人の妻になんてなりたくない……」

3

ラデュイル国の第一王子として生まれた俺は、双子の弟ラファエルと一緒に育ってきたけれど、途中から俺の病気のせいでそういうわけにもいかなかった。

ラファエルは性格の良い奴で、何かと俺にかまってくれていたけれど、母上は役に立ちそうにな

い俺を見捨てたのか冷たくなっていった。それも仕方ないことだとあきらめていたのだから、俺も子どもらしくなかったのかも知れない。

大事なお茶会があるから絶対に出席するようにと言われたのは、九歳の時だった。叔母上が嫁いだバルベナ公爵家とお茶会だ。そういうのは面倒だと思っただけで、母上に言われれば出席しないわけにもいかない。

お茶会の日、おとなしくラファエルと一緒にお茶会会場に向かうとしたけれど、歩き始めたところで身体の異変に気がつく。これは……まずいかもしれない。突然立ち止まった俺をラファエルが心配そうに振り返った。

「アレクシス、どうかしたのか？　もしかして、またか？」

「ああ……お茶会は無理そう。母上に言っておいてくれ」

「わかった……」

王妃の庭に入った後、俺だけお茶会ではなく奥にある小屋へと向かう。魔力を抑え切れなくなった時にやり過ごすための小屋だ。

ラファエルとは双子で生まれたのに、俺だけ桁^{けた}違いな魔力を持っていた。その分、期待されていたようだが、俺は魔力を外に放出することができなかった。

もともと王族は魔力量が多いが、普通は三歳になる頃には自然に魔力を放出できるようになる。それができない場合、多すぎる魔力は身体を傷つけてしまうそう。俺は五歳になった時に倒れ、魔力が溜まりすぎていることがわかった。足りない場合は魔力を注いで補っても、この国の医術で

は多すぎる魔力を抜くことはできなかった。

六歳になった頃、溜まる一方の魔力に身体が振り回され、体調を崩すことが多くなった俺のため、国王である父上は隣国クルナディアに助けを求めた。我が国よりも魔術の研究が進んでいるクルナディアならば、俺の身体も治すことができるだろうと期待したのだ。同盟国の幼い王子が命を失うかもしれないということで、クルナディアの国王はすぐに魔術師を手配してくれた。

派遣されてきた魔術師は俺の状態を調べて、魔力を放出させるための腕輪を作ってくれた。その腕輪をつけて魔力を調整できるようになったおかげで体調を崩すことはなくなった。

それに喜んだ父上はクルナディアから魔術具を輸入すると決め、たくさん魔術具がこの国で使われるようになった。今の王都を守っている結界もその一つだ。

ただ、クルナディアの魔術師でもこれほど俺の魔力が多いとは予想外だったのか、八歳を過ぎた頃から放出が追いつかず、また体調を崩すようになってしまった。魔術師たちが新しい腕輪を作ろうとしてくれているが、放出する力を強めるのは難しく難航している。

もし、魔力が溜まりすぎて身体が耐え切れなくなれば、魔力暴走を起こしてしまうかもしれない。万が一を考え、危なくなった時に俺が一人でこめれるように小屋が用意された。

誰も来ることがない王妃の庭の奥。ここなら魔力暴走が起きても誰も巻き込まずに済む。ラファエルも護衛も使用人も、小屋に来るときは俺に付いてこようとしていない。

今日のお茶会の客人はバルベナ公爵家の夫人と令嬢二人だと聞いていた。どちらも俺たちより二つ年下で七歳になったばかり。ようやく王宮に招待できると母上は喜んでいてた。

降嫁した叔母が産んだ従妹は一人だけだと思っていたが、話を聞けば、もう一人は後妻の連れ子を養女にしたらしい。母上は養女のほうは気にしなくていいから、従妹を大事にするようにと言った。ラファエルは何も考えていないよう従妹と会えるのを喜んでいただけ、俺はあまり会いたいと思わなかった。俺とラファエルをその令嬢に会わせるのは、将来の妃候補として考えているからで、その従妹と結婚するほうが王太子になるのだろう。

俺は王太子になるつもりはないし、まだ九歳なのに婚約の話は気が重かったから、会わなくて済んでよかったかもしれない。

そんなことを考えながら小屋に着いたら、小屋の中を覗こうとしている小さな女の子がいた。ドレス姿だから、どこかの貴族の令嬢か。王妃の庭にどうしているんだと思って声をかけてみたら、お茶会に招待されたバルベナ公爵家の令嬢だった。

思わず身構えそうになったけれど、連れ子のほうだと聞いてホッとす。この子は妃候補として紹介されるために来たわけじゃないし、どうやら夫人と従妹から邪魔だと言われて追い出されたようだ。

連れ子だからって、この子に責任はないのにな。濃い茶色の髪は貴族の令嬢としては評価されないかもしれない。それでもはつきりとした緑色の目は綺麗だし、よく見れば顔立ちも整っている。美しい令嬢に見えないのはおどおどした態度と、怒られるんじゃないかって不安そうな表情をしているせいだ。

なんとなくバルベナ公爵家の内情が見えた気がして、まだ会ったこともない夫人と従妹の意地の

悪さが想像できた。

あまりにも不安そうにしているから、思わず頭を撫でてしまったら驚いたあとでうれしそうに笑う。

令嬢に勝手にさわってはいけないと教えられていたけれど、ついふれてしまったのは三歳下の弟と同じくらいの身長だったからかもしれない。

お茶会に戻れないなら一緒に遊べばいいかと思つて、手をつないで奥へと向かう。クラリスを楽しませようと王妃の庭をあちこち連れ回して、自分が体調を崩していたのをすっかり忘れていた。気がついた時には魔力が溜まり切った身体が重くてうずくまる。

「どうしたのですか!？」

「……身体に魔力が溜まってしまっただけだ。少しすれば、落ち着く。魔力暴走するかもしれない。危ないから、離れていて……」

魔術具の腕輪が急作動して、魔力を放出しているのがわかる。ゆっくりだけど、少しずつ身体は楽になっていく。時間にしてみれば二十分ほどのことだったが、苦しんでいる俺には数時間にも感じられた。

顔を上げたら、クラリスはすぐそこに立っていた。危ないと言ったのに離れなかったのか。

「……もう、大丈夫だと思う」

「誰かに言つて、水をもらつてきましょうか？」

「いや、いい。あまり大げさにしたくないんだ。ああ、でも、こんなに魔石を消耗してしまつたら